虹の誘惑（抜粋）

　どう見てもかおりは、五十歳には見えない。傍目には三十代の中頃に映る。だが、僕の性欲度は下降線の一途である。かおりは僕の女関係を必死で洗っているらしい。
　そういうことは、無駄であると主張しても、僕が否定すればするほど変な言い訳になる。僕の不能に、かおりの不満は爆発寸前なのである。
　僕は正真正銘の病人なのだ。
　電車や街角では、ＯＬの肢体や少女の清純さに視姦の誘惑がある。誠実で真面目そうな男は大抵皆そうである。だが、どう見ても、真面目そうに見えない僕は、巷では不利である。
　ぐうたら風な僕にも一生、そういう女体好きの性癖は直りそうもない。自信をもって言えるのはその事ぐらいである。
　自分を立ち直らせる、きっかけは僅かだが、案外そういうところにあるのかもしれない。
　石神井公園の自宅からの通勤電車では、その日の気分によって、時折ルートを変えている。
　路線によっては女の魅力や、雰囲気が少しずつ変わる。僕にとっては、それを比較するのが楽しみなのだ。女への観察好きは生まれつきである。人から見れば、アブナイ一歩手前なのかもしれない。
　たとえば車内を見渡す。女子高生や女子大生、ＯＬ、年配の良妻賢母が僕の眼に留まる。時には、その一人一人が僕と関係をもったら、どんなドラマがあるだろうかと夢想してしまう。
　夜の生活。趣味。思考レベル。生活観。常識度。不倫。本能。現実には難しいが、それが、どんどん彼女たちの体の中に入ってしまう。
　ついには、その女と一心同体になる。痴漢したい気持ちがあっても、抑制するのは、豊かな想像力と猥雑心があるからだ、と自分を慰める。痴漢や痴女を敢えてするのは、僕に言わせればちゃんとした理由がある。
　その人には、想像力がまったくないか、女や男への思いやりが皆無か、頭が空っぽなせいである。
　しかし、僕は実際、肉体的な浮気などしていない。だが、かおりは、年下である僕の女好きにはいつも注視していた。